國學院大學學術情報リポジトリ

例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000126

例示の副助詞「など」によって起用された 補助動詞「す」について

中村幸弘

○ 何のための小稿か

小稿は、現行の古語辞典類が補助動詞「す」の用例として載せることを躊躇している用例―被補助語の末尾が副助詞「など」となっていて、その「など」の上の語句と補助動詞「す」との間に「など」が介在する形となっている用例―をあえて認識させようという、第一の目的をもっている。そのうえで、「など」を伴った名詞に他動詞「す」が接続した、類似する「…などす」と読み分ける前段階の準備作業としての、第二の目的をもっている。その第二の目的は、小稿に続く論考によっ

て解明しようと予定しているが、それに先立って、副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」の存在が明らかになっ
ていなければならないところから、小稿の執筆を思い立った次第である。なお、小稿の用例資料は、新編日本古典文学全集『源氏物語』に拠ることも、ここに併せてお断りしておく。

第一章 「補助動詞「す」の論」^① 未収録の、「など」 介在用例

橋本進吉『新文典別記』^②が掲げた補助動詞（丁）の「僕は笑

ひは(も)「しない」から始まる、その補助動詞「する」の古典語形「す」の最古例を、「乱れや、しなむ」(万葉・二七九一)と認めるところから、旧稿「補助動詞「す」の論」は出発した。四十一年前のことである。

その「や」を介在させた「や、する」は、中古に入ると、「なりや、する」(古今・五二四)を始めとして、八代集で五十八例にも及んだのである。その「や」を(i)として、(ii)「も」、(iii)「やは」、(iv)「ぞ」、(v)「こそ」、(vi)「もこそ」、(vii)「もや」、(viii)「もぞ」、(ix)「しも」、(x)「だに」、(xi)「のみ」、(xii)「は」の順に該当用例が検出され、それらは、それら係・副助詞を各動詞に共起させて、疑問表現や反語表現や等々の各表現を構成するために発生したものであった。そこに、補助動詞「す」が起用されたのであった。

ただ、そこに副助詞「など」を介在させた用例を見ることはなかった。成立して間もない副助詞「など」が『古今和歌集』など八代集和歌に採用されることはなかった。その理解は、副助詞「など」が和歌の用語としては認められる存在となっていなかったということになるうか。

例えば『源氏物語』においても、そこに見る補助動詞「す」は、すべて、係・副助詞を介在させて、何らかの表現を構成す

るためのものである。補助動詞「す」は、そのような目的なくしては用いられないが、作品によって、その介在する係・副助詞には、偏りが見られる。そこで、以下に、『源氏物語』和歌に見られる補助動詞「す」と散文に見られる補助動詞「す」とを、それぞれ、整理していくこととする。

その作業に入って直ちに気づかされたのは、その係・副助詞の上に位置する動詞連用形部分が、動詞+補助動詞連用形であったり、動詞+補助動詞連用形となっている用例が見られることである。当面、以下の各用例列挙に際しては、その補助動詞や補助動詞に圏点(・)を打って注目するにとどめておく。

さて、『源氏物語』和歌に見る補助動詞「す」には、(iv)「ぞ」、(v)「こそ」、(vii)「もや」、(viii)「もぞ」、(x)「だに」、(xi)「のみ」、(xii)「は」を介在させるためのものは、存在しなかった。

- (i) 「や」介在の、和歌の用例―「過ぎや、しぬらむ」(②朝顔476)「消えや、しなまし」(④柏木296)「知られや、せまし」(⑤権本213)「思ひや、すらむ」(⑤総角270)／(ii) 「も」介在の、和歌の用例―「見も、し見よとや」(①末摘花362)「いとひも、せまし」(③藤袴344)／(iii) 「やは」介在の、和歌の用例―「騒ぎや、はする」(①若紫219)「思ひや、はせぬ」(②滯

- 標 「忘れや、は、す」 (② 濬標 305) 「結びや、は、せし」 (④ 夕霧 433) 「すすみや、は、せぬ」 (④ 幻 537) 「恨みや、は、する」 (⑤ 宿木 440) 「嘆きや、は、する」 (⑥ 蜻蛉 246) 「乱れや、は、する」 (⑥ 蜻蛉 268) / (vi) 「もこそ」 介在の、和歌の用例 — 「なりも、こそすれ」 (③ 胡蝶 186) / (ix) 「しも」 介在の、和歌の用例 — 「さはりしも、せじ」 (① 若紫 247) 「忘れしも、せず」 (② 絵合 384) 「はるけしも、せじ」 (④ 若菜上 108) 「移りしも、せじ」 (⑤ 竹河 75) 「忘れしも、せじ」 (⑤ 早蕨 160)

『源氏物語』 散文に見る補助動詞「す」には、(iv) 「ぞ」、(v) 「こそ」、(vi) 「もぞ」、(x) 「だに」、を介在させるためのものは存在しなかった。

- (i) 「や」 介在の、散文の用例 — 「恋ひや、すらむ」 (① 若紫 240) 「なりや、なまし」 (① 紅葉賀 339) 「出でや、ぬらむ」 (① 花宴 359) 「下りや、なまし」 (② 葵 18) 「生ひや、すらん」 (② 須磨 191) 「慕ひや、せまし」 (② 濬標 288) 「うけたまはりや、つらむ」 (② 濬標 306) 「迎へや、せまし」 (② 松風 424) 「知らせや、てまし」 (③ 胡蝶 174) 「はふれや、すらむ」 (③ 蛩 219) 「ありや、すらむ」 (③ 常夏 243) 「見たてまつりや、してけむ」 (③ 野分 276) 「参上らせや、

- せまし」 (③ 梅枝 413) 「出でや、ぬる」 (④ 若菜上 137) 「ながらへや、せん」 (⑤ 竹河 89) 「見えや、ぬらん」 (⑤ 橋姫 141) 「聞きや、たまひつらん」 (⑤ 橋姫 141) 「思ひや、たまふらん」 (⑤ 宿木 424) 「違ひや、にけん」 (⑤ 宿木 446) 「怨じや、たまはんとする」 (⑥ 浮舟 110) 「死にや、にし」 (⑥ 手習 283) 「亡せや、たまひぬらん」 (⑥ 手習 362) / (ii) 「も」 介在の、散文の用例 — 「をさまりも、すべし」 (① 帚木 68) 「背きも、せず」 (① 帚木 76) 「散りも、せば」 (① 帚木 108) 「出で立ちも、すべかりける」 (① 若紫 202) 「まじらひも、せず」 (① 若紫 202) 「過ちも、つべく」 (② 賢木 90) 「見たまひも、せんに」 (② 絵合 370) 「過ちも、つべく」 (② 朝顔 477) 「まじらひも、せ」 (③ 少女 28) 「恨みも、たまはめ」 (③ 少女 54) 「動きも、たまはず」 (③ 少女 58) 「ゆるしたまひも、つべかめれど」 (④ 蛩 217) 「訪れも、せず」 (③ 真木柱 380) 「ありも、すべかりけり」 (④ 若菜上 82) 「見も、せぬ」 (④ 若菜上 149) 引歌の引用 — 「立ちまじりも、すらめど」 (④ 御法 498) 「思しも、なん」 (⑥ 東屋 36) / (iii) 「やは」 介在の、散文の用例 — 「譲りや、は、したまはぬ」 (⑤ 橋姫 129) 「劣りや、は、つる」 (⑥ 蜻蛉 222) / (vi) 「もこそ」 介在の、散文の用例 — 「聞きも、こそすれ」 (① 若紫 201) 「見咎めも、こそすれ」 (② 賢木 123) 「残りも、こそすれ」 (④ 若菜下 174) / (vii) 「もや」 介在の、散文の用例 — 「這ひ入りもや、したま

ひけむ」(④夕霧418) 「ありもや、せまし」(⑤宿木384) 「慰みもや、したまふらむ」(⑤宿木474) / (ix) 「しも」介在の、散文の用例「せかれしも、したまはざらましや」(⑥東屋47) / (xi) 「のみ」介在の、散文の用例「ながめのみ、せられて」(⑥東屋81) / (xii) 「は」介在の、散文の用例「出で入りは、す」(⑥東屋25)

右の用例には、副助詞「など」を介在させた補助動詞「す」の用例を、引用する対象から外してある。それらは、小稿の第三章・第四章・第五章で取り上げていくことになる。

拙稿「補助動詞「す」の論」は、八代集を資料に調査整理したものであった。したがって、和歌に見る補助動詞「す」については、これを網羅しているが、散文にしか現れない「など」を介在させた用例を収録することができないままとなっていたのである。

第二章 『源氏物語』散文に見る「…などす」の「す」

上代に、副助詞「など」は存在しない。『土佐日記』では、

また「酒なにと持て追ひ来て、」(十二月二十七日)の「なに」とであった「など」が、『源氏物語』にあつては、多様な接続をして多様な文脈に用いられて、しかも、それが定着しているのである。体言・活用語の連用形・活用語の連体形・副詞・格助詞・接続助詞・各種の引用句の下に付いていて、それら「など」が、主部・主語にも修飾部・修飾語にも、また、ヲ格補充成分にも二格補充成分にも含まれていたのである。

そのように、多様な文の成分に含まれている「など」のうち、「など」が動詞「す」の上に位置しているものに注目したとき、その「す」が、他動詞「す」なのか、補助動詞「す」なのか、その読解に惑わされる用例に遭遇するようである。その「など」を含む語句が、ヲ格補充成分なのか、動詞連用形に「など」が付いた被補助語なのか迷わされることになるからである。

その読解の困難度の最も高いものが二組あって、それらは、「あそびなどす」と「いらへなどす」とである。その一方に、「御あそびなどす」や「いらへをすーいらへをだにしたまはずー」などを見るのである。さらには、「あそびなどはすーあそびなどしたまへー」とか「いらへをすーいらへだにしたまはずー」とか、また、「あそびをももるともにすーあそびをももる

例示の副助詞「など」によって
起用された補助動詞「す」について

ともにしたまふ」とか「御いらへきこえたまひなどす」御いらへみづからきこえたまひなどするも」とかまで現れるのである。ここに至って、科学としての文法学の構文研究―補助・補助の關係―が読解に役だつ限界を感じさせられて、動詞「す」のなかから、補助動詞「す」を識別した作業に空しさを感じさせられてもいるのである。

実は、その二組の存在に気づかされてから、既に三十年以上が経過している。それら用例そのものに、教場でも出会っている。高校生用教材の指導書執筆などでも出会っている。その都度、そこは処理してきていても、解説までしてきていても、この問題に正面から取り組むことなく生きてきてしまっていたのである。残された時間が限られる筆者である。確かな用例の確かな整理から始めるしかない。

以下に述べるところは、大方の読者には、容易に理解できる事事らではあるが、A（ヲ格補充成分）の a（漢語）と、それ以外との違いが、外来語としての漢語と、この国伝来の和語とであるところから、b（連用形名詞を後項とする複合和語名詞）・c（接頭語「御」を冠し、連用形から転成した和語名詞）と、B（被補助語）としての d（動詞連用形）・e（複合動詞連用形）・f（ヲ格補充成分―時にニ格補充成分―を受け

た複合動詞連用形）・g（動詞に伴われた助動詞・補助動詞の連用形）とを、特に意識して読み分けているかどうか、危ぶまれるようにも思えるのである。いま、それぞれの具体的用例の一部を挙げてその確認をしていきたい。

A―「…などす」の「…など」がヲ格補充成分となり、その「す」が他動詞であるもの

- a―「学問など」「誦経など」「念誦など」「詠など」
- 「学問など」はべるとして（①桐壺85）「誦経など」せさせたまふ」（①夕顔192）「念誦など」したまふも」（②須磨209）「詠など」たまへるは」（①紅葉賀31）／b―「物語などす」
- 「もの笑ひなどす」「手習などす」―「物語など」したまひて」（①夕顔184）「もの笑ひなど」すまじく」（③少女24）「手習など」して」（③胡蝶185）／c―「御祈禱など」「御しつらひなど」「御よろこびなど」―「御祈禱など」せさせたまふ」（②葵49）「御しつらひなど」して」（④若菜上98）「御よろこびなど」したまふ」（②薄雲437）

B―「…などす」の「…など」が被補助語となり、その「す」が補助動詞であるもの

d 「笑ひなど」「使ひなど」 — 「笑ひなど、するけはひ」
 (①帚木 94) 「使ひなど、すれば」 (①夕顔 182) / e 「召し
 使ひなど」「うち笑みなど」 — 「召し使ひなど、たまふ」
 (①末摘花 266) 「うち笑みなど、て」 (①若紫 258) / f 「
 掻きつくろひなど」「捲き上げなど」「着かへなど」 —
 「御髪掻きつくろひなど、たまひて」 (①若紫 254) 「御簾捲
 き上げなど、たまひて」 (④横笛 358) 「このごろの御やつれ
 にまうけたまへる狩の御装束 (二) 着かへなど、て」 (①
 夕顔 177) / g 「読みなされなど」「うち叩かせなど」「参
 りたまひなど」 — 「読みなされなど、つつ」 (①帚木 89)
 「うち叩かせなど、せむに」 (①帚木 110) 「内裏の御宿直所に
 参りたまひなど、す」 (①夕顔 183)

右の「…などす」の A・B の別は、その構文と関わって、動
 詞「す」のはたらきが大きく異なることになる。そもそも、
 動詞「す」は、動作の対象をラ格で提示して、そのラ格補充成
 分に「す」を添える形式で、多様な動作を表現してきている。
 A の各用例とも、それに該当し、その動詞「す」は、いま、他
 動詞として認識されている。そして、それら「す」は、相当す
 る和語動詞が、存在しなかったり見当たらなかったりした場合

に採用された表現形式であったかに感じとれるのである。

一方、B は、d・e・f・g のいずれについても、そこに、
 まず和語動詞が存在する。ただ、その動作は、その和語動詞だ
 けでは表現しきれいなくて、その和語動詞は、例示的位置に
 ある存在である。その情況を表現するのに、和歌の世界で用い
 られていた表現手法を借りることとなった。その和語動詞を連
 用形にしておいて、例示の副助詞「など」を介在させる形式に
 して、活用機能を、補助動詞「す」としての用法を既に定着さ
 せていた、その「す」に託することにしたのである。

A の a は、外来の漢語である。「誦経」「念誦」は、呉音読み
 する仏教語であって、概念を担う語幹に無概念の「す」を添え
 るサ変の複合動詞の発生を偲ばせてくれるものといえそうであ
 る。

b の複合名詞は、本来の名詞と動詞連用形が名詞化した連用
 形名詞とが複合したものである。殊に「物」を冠した「物」
 型複合名詞は、上代からこの中古にかけて生産されていて、筆
 者は、かつて、「居言雑考」その造語経緯について「と題し
 て、その生成過程について若干の考察を試みたことがある。上
 代から中古にかけての連用形名詞の用例に即して、動詞「す」
 を伴ってサ変複合動詞として表現することを契機に品詞転成さ

せていったものと推論していた。そして、その「物語」については、当代はもちろん、近世になるまで、動詞「ものがた」が存在しないことについても確認している。

c 「御祈禱」「御しつらひ」「御よろこび」の「御」は、いうまでもなく尊敬の接頭語で、それによつて、その「御祈禱」「御しつらひ」「御よろこび」が名詞であると判断される。当代にあつては、「御」は、名詞にしか接続しなかつたからである。そこで、これらc群については、連用形名詞か動詞連用形か、引用部分だけでは判断できないことになるが、そのような用例は、存在しないのである。誤解を生む恐れのある表現は、回避することになつていたのであろうか。なお、「御よろこび」の「よろこび」は、〈お礼〉を意味する。また「御祈禱」と表記して、「御祈り」とも、「御いのり」ともしないのは、現代の読者への配慮である。

さて、Bの被補助語については、それら「など」の上が連用形名詞でないことを証明しなければならぬことにもなるであらう。それには、d・eに先立って、fの各用例によつて、その証明をしていくのが望ましい。上接する文の成分との関係で、名詞ではないことが明らかになるからである。

- f 1 御髪搔きつくろひなどしたまひて…。
- f 2 御髪捲き上げなどしたまひて…。
- f 3 狩の御装束着かへなどして…。

右の——は、補助・被補助の関係で、f 1の「掻きつくろひなどしたまひて」は〈お髪を〉体裁よく整えなどなさつて」ということであり、f 2の「捲き上げなどしたまひて」は〈御簾を〉上のほうへ捲き上げたりなどなさつて」ということである。f 3の「着かへなどして」は、〈狩衣というお召し物に〉着替えたりなどして」ということである。補助・被補助の関係の二文節は、例示として掲げた一動作を述べているのであつて、f 1の「搔きつくろひ」もf 2の「捲き上げ」もf 3の「着かへ」も、後続する「し(す)」と一体となる動詞であつて、名詞ではない。それぞれのの上にある「御髪」「御簾」というヲ格補充成分や「…狩の御装束」というニ格補充成分を受ける動詞「搔きつくろふ」「捲き上ぐ」「着かふ」である。

右のfの補助・被補助の関係は、d・e、また、gにも適用することができ、それぞれの被補助語は、動詞・動詞+助動詞・動詞+補助動詞の連用形であると判断することができる。

以上、b・cとd・e・f・gとについて、それぞれに読み分けてきて、AとBとの別を明らかにしてきたが、連用形名詞化しているか、そうではなく連用形であるかの判断は、必ずしも容易ではない。筆者にとって生涯恩恵を受けた書物として吉沢義則・木之下正雄著『対校源氏物語新釈索引』⁵⁾があるが、その取り扱いに従うと、小稿で、いま連用形と判断した被補助語の一部とした、その語は、すべて、名詞となっている。それはそれで、一貫性あるものとなっているが、いま、小稿が、名詞ではないと証明したf1・f2・f3の各用例については、どう読解することになるであろうか。

『源氏物語』散文に見る「…などす」については、なお、明らかにしておきたい問題点を残してはいるが、小稿が絞ったテーマ、例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」の整理の必要性は明白となった。以下の各章においては、もっぱら、その補助動詞「す」の用例を列挙していくこととなる。

第三章 「動詞連用形+などす」型補助動詞「す」

『源氏物語』に見る補助動詞「す」が、どのような動詞に副

助詞「など」を共起させて、その動詞を例示として位置づけようとしていたかの観察資料となるよう整理することとする。その整理に際しては、どれほどの動詞がその対象になったかが直ちに見えるように異なり語番号を付したうえで、その動詞をひらがな書き・終止形で掲げることとした。加えて、用例の引き方については、地の文・会話文の別を明らかにし、前後の文脈が読みとれるよう配慮した。さらに、それら動詞を五十音順に配列して、大方の便に供しやすくするように努めた。

- 1 あへしらふ ○…、あへしらへなど、□たまへば、…。(4) 横笛 366) / 2 あゆむ ○…歩みなど、□たまふ…。(4) 横笛 349) / 3 あらたまる ○…改まりなど、□たまふを、…。(2) 蓬生 334) / 4 ありく ○…歩きなど、□けり。(6) 蜻蛉 273) / 5 あれゆく ○…、散れゆきなど、□て…。(2) 滂標 318) / 6 いづ ○…出でなど、□たまふ…。(6) 蜻蛉 257) / 7 いでいる ○…出で入りなど、□たまへば、…。(1) 夕顔 153) / 8 いでく ○…出で来など、□つつ、…。(5) 竹河 101) ○…出で来など、□て、…。(5) 竹河 105) / 9 いひこしらふ ○…言ひこしらへなど、□て…。(5) 宿木 432) / 10 いひつたふ ○…言ひ伝へなど、□める…。(5) 総角 258) / 11 いひなす ○…言ひなしなど、

例示の副助詞「など」によって
起用された補助動詞「す」について

すれど、…。(3)藤裏葉452) / 12 うく ○…受けなどして、
 …。(1)夕顔174) / 13 うけたまはる ○…聞こえさせうけた
 まはりなどして、…。(5)宿木447) / 14 うちあふぐ ○…う
 ちあふぎなどして、…。(6)東屋66) / 15 うちかく ○…う
 ち懸けなどして、…。(6)浮舟123) / 16 うちつづく ○…
 うちつづけなどしたまふ。(3)常夏248) / 17 うちなく ○
 …、うち泣きなどしたまへど、…。(1)若紫261) ○…うち泣き
 などしたまふ。(1)末摘花279) / 18 うちほほゑむ ○…うち
 ほほ笑みなどして、…。(3)少女25) / 19 うちまじる ○
 …うちまじりなどしたるをも、…。(5)宿木441) / 20 うちみ
 じろく ○…うち身じろきなどしたまふ御衣のおとなひ…。
 (4)夕霧400) / 21 うちやすむ ○人々もおのおのうち休みな
 どして、…。(6)東屋59) / 22 うちゑむ ○…うち笑みなど
 してゐたまへるが…。(1)若紫257) / 23 うつ ○…碁打ちな
 どしてぞ…。(6)手習354) / 24 うつろふ ○…移ろひなどし
 たまはむを、…。(5)総角244) / 25 うらむ ○…恨みなどし
 たまはば、…。(3)真木柱363) / 26 おきかへる ○…起きか
 へりなどしたまふ。(1)紅葉賀328) / 27 おしまく ○…おし
 巻きなどして、…。(5)総角274) / 28 おはします ○…お
 はしましなどして、…。(6)蜻蛉252) / 29 おひさく ○…追

ひ避けなどするに、…。(6)浮舟191) / 30 おもひしりはじむ
 ○…思ひ知りはじめなどしたる…。(6)浮舟139) / 31 かい
 く ○…掻い掃きなどする人も…。(2)蓬生330) / 32 かかぐ
 ○…灯あかくかかげなどして、…。(1)帚木95) ○灯かかげ
 べし。(1)帚木98) / 33 かきつろふ ○御髪掻きつく
 ろひなどしたまひて、…。(1)若紫254) / 34 かきはらふ ○
 …塵かき払ひなどするにつけても、…。(5)椎本206) / 35 か
 きやる ○…御髪かきやりなどして、…。(4)夕霧480) / 36
 かくす ○…隠しなどして、…。(3)玉鬘106) / 37 かたらひ
 つく ○…語らひつきなどしたまひつつ、…。(5)総角305) /
 38 かよはす ○…御文通はしなどして、…。(2)賢木147) /
 39 かよふ ○…御文通ひなどして、…。(4)若菜上92) / 40
 きかふ ○…着かへなどして、…。(1)夕顔177) / 41 きこえう
 がかす ○…聞こえ動かしなどしたまへど、…。(3)蛭203) /
 42 きこえかかろ ○…聞こえかかりなどするをり…。(1)紅
 葉賀335) / 43 きこえかはす ○…聞こえかはしなどして、
 …。(3)常夏235) / 44 きこえごつ ○…聞こえごちなどした
 まふも…。(5)匂兵部卿28) / 45 きこえまつはす ○…聞こ
 えまつはしなどするに…。(4)若菜上163) / 46 きこゆ ○…
 聞こえなどせむ人の…。(4)若菜上53) / 47 くす ○…いと

- いたく屈くしなど、□たまへば、…。(①紅葉賀317) / 48 くだる
 ○…国に下くだりなど、□て、…。(①蛭118) / 49 くはふ ○…目
 とまるべきふし加たへなど、□て、…。(①夕顔146) / 50 くひか
 なくなる ○…食くひかなぐりなど、□たまへば、…。(④横笛350)
 / 51 さしあつ ○…、宿直ととのみにさし当あてなど、□つつ、…
 (⑥浮舟114) / 52 さしいづ ○…御褥とじさし出ででなど、□するさま
 も、…。(⑤宿木392) / 53 さしぬふ ○…おのおのさし縫ぬ
 など、□す。(⑤宿木440) / 54 さしのく ○…さし退のけなど、□
 べき御身みにもあらず(②葵22) / 55 さしのぞく ○…、さ
 しのぞきなど、□たまひつつ、…。(②蓬生355) / 56 さだまる
 ○…、なほなほしき方に定かたまりなど、□するも…。(①末摘花266)
 / 57 ししいづ ○…、便びんないことし出ででなど、□する…。(③胡
 蝶177) / 58 しくはふ ○…ここにてし加かへなど、□するほどに
 …。(③玉壘105) / 59 したためおく ○…したためおきなど、
□するまに、…。(③真木柱371) / 60 しちらす ○撒うちり散ち
 らしなど、□て…。(④横笛360) / 61 しづむ ○…見知らぬさ
 まにひき入り沈しみなど、□れば、…。(④夕霧456) / 62 しなす
 ○前せん裁ざいの本立もとだちも涼すずしうしなしなど、□て、…。(②蓬生354) /
 63 しひそす ○…酒強しひそしなど、□て、…。(②明石244) /
 64 する ○公事おほやけごとはあるべきさまに知りなど、□つつ、…。(③
 真木柱398) / 65 すくひいる ○…手づからすくひ入れなど、
□するに、…。(⑥手習287) / 66 そふ ○念仏僧ねんぶつそうの数添かずぞへなど、
□させたまふ。(⑥蜻蛉237) / 67 たちぬふ ○…、裁たち縫ぬ
 など、□するを、…。(⑥手習360) / 68 たつ ○…物裁ものざちなど、
□するねび御達ごたち、…。(③野分281) / 69 だつ ○…、前に立た
 など、□たれど、…。(②閑屋360) / 70 たてまつりかふ ○…
 御衣ぎども奉ほうり換かへなど、□すれど、…。(③真木柱366) / 71 たて
 まつる ○取りて一つ奉ほうりなど、□たまふ心の…。(⑥蜻蛉252)
 / 72 たてまつる ○…、奉ほうれなど、□たまふ。(⑤椎本188) /
 73 たはぶる ○…、さやうにまつはし戯たはれなど、□らんは、
 …。(①紅葉賀334) / 74 たまはす ○…、綾あやの料賜れうたませなど、□
 たまひける。(⑤宿木442) / 75 たまふ ○御誦経みずきやうせさせたま
 ふ僧そうに物賜ものたまひなど、□て、…。(⑥浮舟142) / 76 つかふ ○…
 召よし出でて使つかひなど、□れば、…。(①夕顔182) / 77 つかふ
 ○…、装束きざうととのへなど、□て、…。(③玉壘127) / 78 とぶら
 ひものす ○「…、とぶらひものしなど、□はべりなんかし」
 (⑥夢浮橋379) / 79 とりいる ○「…、御文みふみばかり取り入れ
 など、□はべるめれど、…」(③胡蝶179) / 80 とりちらす ○
 …、人々ひとびとにとり散ちらしなど、□たれば、…。(⑤宿木440) / 81
 とりなす ○…、空そらのけしきにつけてもとりなしなど、□て、

例示の副助詞「など」によって
起用された補助動詞「す」について

…。(①末摘花 275) ○…、この御方さまをよからずとりなしな
ど、するを、…。(⑤竹河 105) / 82 とりませ ○…、物にとり
ませ、すてもあるを、…。(⑤宿木 438) / 83 とりませ ○
くだもの取り寄せなど、すて、…。(⑤宿木 491) / 84 なやむ
○…、なやみなど、すければ、…。(③玉鬘 90) / 85 なる ○
…次々に多うなりなど、すて、…。(④柏木 335) / 86 ぬるむ
○「…、うちはへぬるみなど、すたまへることは、…。(⑥手習
297) / 87 のぞく ○「…のぞきなど、すべかめるに、…。(①
夕顔 149) ○…、ただ、ものよりのぞきなど、すて、(⑥浮舟 116)
/ 88 のたまひたはぶる ○…のたまひ戯れなど、すて、…。
(①末摘花 298) / 89 はひまぎる ○「…、時々這ひ紛れなど、
すたまへるつれなさを、…。(②明石 263) / 90 はひわたる
○…ふと這ひ渡りなど、すたまへど、…。(②薄雲 438) / 91 ひ
きあぐ ○…、括り引き上げなど、すて、…。(①夕顔 172) ○
…、引き上げなど、すたる姿も…。(⑥浮舟 149) / 92 ひきかく
○…、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかくひき掛けなど、
するに、…。(④幻 538) / 93 ひきさく ○…、馬どもひき避
けなど、すつつ、…。(⑤宿木 488) / 94 ひきつくるふ ○…、
御座ひきつくるひなど、す。(⑤総角 287) / 95 ひきつむ ○
「…、おいらかにひきつみなど、すて教へたまへ。…。(④若菜上

85) / 96 ひきとどむ ○ひきとどめなど、すべきほどにもあら
ねば、…。(⑤椎本 199) / 97 ひきなほす ○…、几帳ひきな
ほしなど、す。(③野分 284) / 98 ひきまさぐる ○…、御衣の
袖を引きまさぐりなど、すつつ、…。(④幻 530) / 99 ひきやる
○…、御衣ひきやりなど、すたまふに、…。(④若菜上 69) / 100
ひく ○…、琵琶弾きなど、すつつ遊ぶ。(⑥手習 302) / 101 ふ
く ○…、笙の笛吹きなど、するを…。(②賢木 141) / 102 ふす
○おのおの入りて臥しなど、するを聞きたまひて…。(⑥東屋
93) / 103 ほのみゆ ○なべてならぬ際の人々にはほの見えな
ど、すたまふ。(②須磨 207) / 104 まかづ ○…、人も近くさぶ
らはず、あるはまかでなど、すぬるほどに、…。(②薄雲 449) /
105 まかでちる ○…、人々は近くも参らず、まかで散りなど、
すて、…。(⑤紅梅 50) / 106 まかなひなほす ○…、とかう
手づからまかなひなほしなど、すたまへど、…。(④夕霧 423) /
107 まきあぐ ○…、御簾捲き上げなど、すたまひて、…。(④
横笛 358) / 108 まじる ○…、男方の御遊びにまじりなど、す
て、…。(①紅葉賀 339) / 109 まありあつまる ○…、人々多
く参り集まりなど、すれば、…。(⑤早蕨 367) ○…、人々参り集
まりなど、すれば、…。(⑤宿木 399) / 110 まゐる ○…、参り
など、すたまひても…。(②滯標 322) ○親しく参りなど、すたまふ

君なれば、… (3) 藤袴 345 ○人々参りなど、□たまひて、…
 (4) 若菜上 56 ○…、時々御宿直とて参りなど、□たまひつつ、…
 (5) 宿木 386 / 111 まある ○こなたにて御くだものばかり参り
 など、□たまへど、… (2) 薄雲 435 ○御くだものばかりまあり
 など、□て大殿籠りぬ。 (4) 若菜下 249 ○誰も誰も御台まありな
 ど、□て、… (4) 夕霧 431 ○昨日今日つゆもまゐらざりけるも
 の、いささかまありなど、□ておはす。 (4) 夕霧 474 ○物まあり
 など、してうちやすみたまへり。 (6) 浮舟 147 ○…、車とめて湯
 まありなど、□たまふ。 (6) 手習 290 ○…、物まありなど、□たま
 ふにぞ、… (6) 手習 298 / 112 みあく ○さすがに、時々目
 見あげなど、□つつ、… (6) 手習 288 / 113 みいる ○…、見
 入れなど、□けるほどに、… (6) 手習 338 / 114 みえかはす
 ○…、かくゆるして見えかはしなど、□たまふも、… (4) 若菜
 下 211 / 115 むすぶ ○…、もろともに結びなど、□たまふ。
 (5) 総角 242 / 116 めしつかふ ○…、君も召し使ひなど、□た
 まふ。 (1) 末摘花 266 / 117 もてなす ○…、憎げにもてなし
 など、□はこそ、うたてもあらめ、… (5) 宿木 421 / 118 やすむ
 ○日ごろいたうさぶらひ困じたる人はみな休みなど、□て、…
 (6) 手習 344 / 119 よびあつむ ○…、たよりにつけて呼び集
 めなど、□てさぶらはせしも、… (3) 玉鬘 127 / 120 わたる

○…、さるべきをりをりは渡りなど、□たまふ。 (2) 滯標 316 /
 121 わらふ ○…、笑ひなど、□するけはひことさらびたり。 (1) 帚
 木 94 ○…、もの言ひ笑ひなど、□て睦れたまふを見るままに、
 … (2) 松風 415 / 122 るしづまる ○…、るしづまりなど、□
 たるに、… (6) 手習 282 / 123 あてまある ○…、内裏にも
 率て参りなど、□たまふ。 (1) 帚木 108 / 124 をる ○…、関伽
 奉り、花折りなど、□するもあらはに見ゆ。 (1) 若紫 201

以上が、「あそびなど、□」「いらへなど、□」に関する二用例を
 除いた、『源氏物語』に現れる「動詞連用形+など、□」型補助
 動詞「す」の全用例である。実は、その異なり語数百二十四語
 と共起する補助動詞「す」のなかに、一用例だけ、その「…な
 ど、□」の上に位置する単語が、現代人の目からは、動詞連用形
 なのか連用形名詞なのか、そのままで判断できない用例が含
 まれている。76の「使ひなど、□れば、」の「使ひ」だけである。

第四章 「動詞+受身・使役の助動詞連用形+など、

□型補助動詞「す」

品詞にこだわって観察したとき、係・副助詞の上に位置する

動詞連用形部分が動詞＋助動詞連用形となつている用例の存在すること、既に指摘してきている。いま、副助詞「など」の上
が、その動詞＋助動詞連用形となつている用例については、本
章において、その用例だけ切り離して、一定の整理を試みてお
くこととする。

その助動詞は、助動詞とはいつても、「る」「らる」「か」「す」
「さす」かに限られるのである。その「る」「らる」「か」「す」
「さす」等は、時枝誠記『国語学原論』が主体的なものの直接
的表現に与らないとして辞から除外すべきだとした⁶、その一群
の助動詞である。したがつて、この「る」「らる」／「す」「さ
す」等は、助動詞ではなく、接尾語とされているのである。

右事情によつて、本章において以下に掲げる『源氏物語』に
見る諸用例は、前章において掲げた「動詞連用形＋など、す」型
補助動詞「す」と変わるものではなく、学校文法的な視点から
は「動詞＋助動詞連用形＋など、す」型補助動詞「す」と呼ぶこ
とになる、ということではしかなないのである。その引用の要領
は、配列順を作品における出現順とする点を除いて、前章と
まったく同じ体裁で、以下に⑦「る」「らる」を伴うもの、①
「す」「さす」を伴うものの小分類見出しを設けて列挙してい
くこととする。

⑦ 「る」「らる」を伴うもの

125 (読みなさ)る ○…こはしき声に読みなされ、
ど、つつ、…。(①帚木89)／126 (聞こえわたさ)る ○
松の響き木深く聞こえわたされ、つて、…。(④夕霧
402)／127 (おきぬ)らる ○…やうやうかう起きる
られ、つはべるが、…。(⑤椎本194)

① 「す」「さす」を伴うもの

128 (うちたたか)す ○…忍びてうち叩かせ、つむ
に、…。(①帚木110)／129 (ならは)す ○手本書きて習
はせ、つつ、…。(①紅葉賀317)／130 (とは)す ○
時刻間はせ、つたまふほどに、…。(②葵27) ○…、も
の間はせ、つするも、…。(②薄雲430)／131 (とか)す
○…、おほつかなき所どころ解かせ、つておはします
を、…。(②賢木120)／132 (ひきつくるは)す ○…、こ
こかしこの御座ひきつくるはせ、つつ、…。(②蓬生
345) ○…御座ひきつくるはせ、つたまふ御用意おろかな
らず(③藤裏葉436)／133 (のま)す ○…、しばし湯
を飲ませ、つて、…。(⑤宿木285)／134 (てうぜ)さす

○…ことさらに調せさせ、など、□つつ、…。(5)宿木412)
 / 135 (いは)す ○「…」と言はせ、など、□。(6)浮舟
 131 / 136 (せ)さす ○(書簡)…誦経所どころせさせ、
 など、□はべるを、…。(6)浮舟194)

以上が、『源氏物語』に見る「動詞+助動詞連用形+など、□」型補助動詞「す」の全用例である。その補助動詞は、受身・使役の関係を添えるだけのはたらきで、時枝文法では活用する接尾語とされるが、一般的には補助動詞として取り扱われるものである。そこで、それら全用例とも、「動詞+助動詞連用形+など、□」型補助動詞「す」として取り扱っていくこととする。

第五章 「動詞+敬讓の補助動詞連用形+など、□」型補助動詞「す」

動詞+敬讓の補助動詞で始まる語句に副助詞「など」を共起させて、その語句を例示として位置づけようとした結果、その語句末の敬讓の補助動詞を連用形にして、「など」の下に補助動詞としての「す」を添えた表現が構成されたのであった。既に小稿第一章の(2)の該当用例として引いている「見たまひも、□

んに」(2)総合370)などに倣って成立した表現形式である。

以下に、その該当用例を、前々章・前章の要領に従って列挙していくこととする。小分類見出しとして、㊦「たまふ」を伴うもの、㊧「きこゆ」を伴うもの、㊨「たてまつる」を伴うものに次いで、二方向への敬意を表す㊩「きこえたまふ」を伴うもの、さらに、二重敬語としての㊪「せたまふ」「させたまふ」を伴うものを設けることとした。なお、その㊫の「せたまふ」「させたまふ」に含まれる補助動詞「せ」「させ」は、前章の①に該当する。その取り扱いについては、上接する各動詞の接尾語と見たいところであるが、いま、教育現場の現状などから考えて、「せたまふ」「させたまふ」として整理することとする。

㊦「たまふ」を伴うもの

137 (まゐり)たまふ ○…、内裏の御宿直所に参りたまひなど、□。(1)夕顔183) ○…、外には例のやうに人々参りたまひなど、□すれど、…。(4)幻521) / 138 (まかで)たまふ ○…、宮もまかでたまひなど、□て、…。(2)賢木108) / 139 (わたり)たまふ ○…をりふしことに渡りたまひなど、□て、…。(2)濔標284) ○…、渡りたまひなど、□す

…。(2) 濔標 309) ○…、御幸もところせからで渡りたまひ
なと、つ、…。(4) 若菜下 160 / 140 (うせ) たまふ ○
…、通ひ参りし齋院亡せたまひなど、して、…。(2) 蓬生
332 / 141 (みえ) たまふ ○なかなか異方の姫君は、見え
たまひなど、して、…。(5) 紅梅 52 / 142 (むつびまゐり)
たまふ ○…、この君たちの睦び参りたまひなど、するほ、
…。(5) 竹河 62 / 143 (きこえ) たまふ ○…、なつかし
うもの聞こえたまひなど、す。(5) 竹河 64)

㊦ 「きこゆ」を伴うもの

144 (いらへ) きこゆ ○…、他事は、いとをかしくけ近
きさまに答へきこえなど、してなびきたるを、…。(6)
浮舟 130)

㊧ 「たてまつる」を伴うもの

45 (ゐて) たてまつる ○…、内裏にも率て奉りなど、し
たまふ。(1) 帚木 108 / 146 (をしへ) たてまつる ○御琴
ども教へたてまつりなど、して、…。(5) 宿木 408)

㊨ 「きこえたまふ」を伴うもの

147 (おどろかし) きこえたまふ ○…、おどろかしきこえ
たまひなど、すれば、…。(2) 葵 75 / 148 (そそのかし) き
こえたまふ ○…、さるべきにはそそのかしきこえたまひ
など、するを、…。(3) 胡蝶 176 / 149 (もてなし) きこえた
まふ ○…、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひ
など、せしほに、…。(4) 若菜上 18)

㊩ 「せたまふ」「させたまふ」を伴うもの

150 (せ) せたまふ ○…、さまざま尊きことどもをせ
させたまひなど、して、…。(2) 賢木 140 / 151 (ととのへ)
させたまふ ○…、ゆるべる緒ととのへさせたまひなど、
す。(3) 初音 161 / 152 (ふか) せたまふ ○…、笛など
わざとなく吹かせたまひなど、して、…。(4) 鈴虫 385 / 153
(やら) せたまふ ○…、ものついでに御覧じつけて、
破らせたまひなど、するに、…。(4) 幻 546)

以上が、『源氏物語』に現れる「動詞+敬讓の補助動詞連用
形+など、す」型補助動詞「す」の全用例である。これら用例の
観察からは、幾つかの発見が期待される。例えば㊦の各用例
は、第三章「動詞連用形+など、す」型補助動詞「す」の一覧に

見る1・2・6・7・16・17などの「動詞連用形+など、す」型補助動詞「す」が、補助動詞「たまふ」を下接する用例と、どのような相違があるのかなど、関心をそえられる問題点が直ちに見えてくるのである。ただ、小稿は、例示の副助詞「など」によっても補助動詞「す」が起用されていたことを論述し、その実態を紹介することを目的とするところから、本章も、ここまででとどめることとする。

第六章 例示の副助詞「など」によつて起用された補助動詞「す」の存在確認

補助動詞「す」は、動詞に係・副助詞を共起させて、その係・副助詞の機能を發揮させるために起用されて、その結果、「動詞連用形+係・副助詞+す」という表現形式が構成された。その用例は、当初、和歌にかぎられていたようだが、徐々に散文にも採用されるようになっていったと思われる。その散文資料として『源氏物語』の補助動詞「す」を観察したとき、その係・副助詞に、和歌には見られなかった副助詞「など」が関わる用例が大量に見られたのであった。ただ、大方の古語辞典や古典文法書の用例に、その「など」が関わる補助動詞「す」の

引かれることがなかったようである。

とにかく、補助動詞「す」は、和歌に、その用例が頻度高く存在する。拙稿「補助動詞「す」の論」は、そこで、八代集を資料に、その整理をして報告した。論文としての報告はそうであったが、散文の読み解く際の筆者は、「動詞連用形+など、す」型「す」についても、それは当然、補助動詞「す」であると認識していた。ただ、「動詞連用形+など、す」の「す」が、補助動詞であると、改めて活字化することないまま、四十年、放置していたのである。その間、「動詞+補助動詞連用形+など、す」型補助動詞「す」や「動詞+敬讓の補助動詞連用形+など、す」型補助動詞「す」について、いつか取り立ててもよいか、と思ったことはあった。しかし、「動詞連用形+など、す」型補助動詞「す」について、改めて論文化する必要性など感じたことはなかったのである。

今回、小稿において、「動詞連用形+など、す」型の「す」はもちろん、「動詞+受身・使役の補助動詞連用形+など、す」型の「す」も「動詞+敬讓の補助動詞連用形+など、す」の「す」も、いずれもが補助動詞「す」であることを証明しえた。第二章のBとして引いた諸用例を用いて、その構文を観察することによつて論述することができた。続いて、第三章・第四章・第

五章を通して、『源氏物語』散文の全用例を一覧化した。「動詞連用形+など^す」型補助動詞「す」・「動詞+受身・使役の助動詞連用形+など^す」型補助動詞「す」・「動詞+敬讓の補助動詞連用形+など^す」型補助動詞「す」の全用例を掲げる結果となった。そこで、注目したいのは、異なり語数が、受身・使役の助動詞や敬讓の補助動詞を添加させたものも含めてではあるが、百五十三語に及んだのであった。いや、今回、あえて意図的に小稿で取り上げることを選んだ「あそびなど^す」「いらへなど^す」を加えるなら、百五十五語となるのである。したがって、補助動詞「す」の用例は、「や」や「も」や「だに」など、どの係・副助詞が共起し、介在する「○○や^{する}」「○○だに^{せよ}」などよりも、副助詞「など」を共起させ、介在させる「○○など^す」「○○など^だたまふ」などのほうが多かったのである。

それにしても、『源氏物語』など、中古和文の、その散文には、多様な語や語句に副助詞「など」と動詞「す」とを下接させた用例を、実に多く見るのである。第二章のAとして、その一部を見た「学問など^はべるとて」(①桐壺85)・「物語など^はたまひて」(①夕顔184)「御祈禱など^はせさせたまふ」(②葵49)などである。補助動詞「す」の認識は、そのような多くの

「○○など^す」との識別から始まるといつてよいであろう。例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」の存在は、「○○など^す」の識別から始まるといつてよいのである。

小稿の題目に相当する用例は、第二章のBのd・e・f・gの挙例としての用例と、第三章・第四章・第五章の全用例が該当する。それら用例が補助動詞「す」であることの論証は、第二章のf1・f2・f3の図解によって説明した、補助・被補助の関係図が該当する。その補助・被補助の関係部分が他の文の成分との関係とは異なって、緊密な関係にあることが理解できたとき、補助動詞「す」の存在が確認できたといえることになるであろう。

第七章

例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」の表現形式の定着と新形式への展開

例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」は、一定の表現形式を構成することになった。その補助動詞「す」の被補助語は、「動詞連用形+など」だけでなく、「動詞+受身・使役の助動詞連用形+など」「動詞+敬讓の補助動詞

連用形+など」へと広がりを見せることになった。和歌資料には見られなかったところである。

その表現形式は、「動詞型活用語連用形+など」す型補助動詞「す」といつてもいいようだが、その広がりには、その活用語に共起させるために投げ込まれた副助詞「など」の下に、さらに助詞を介在させる新形式を見せることにもなる。それというのも、まずは、「動詞型活用語連用形+など」す型補助動詞「す」のその表現形式が確かな定着を見せたからであろうと感じとれてくる。その新形式は、副助詞「など」の下に、係助詞「は」「も」を挟み込むものであった。もちろん、その一文の構文と関係するものではあるが、いまは、その該当用例を紹介するにとどめておくこととする。

(1) さらに、係助詞「は」を介在させた形式

○…泣きなどははたまはず。(②薄雲431) / ○こちたく苦しがりなどははたまはねど。(⑤宿木385)

(m) さらに、係助詞「も」を介在させた形式

○…あはれなる世を言ひ言ひてうち泣きなどももたまひけり。(②葵54) / ○…例はことに鎖し固めなどももせ

ぬを、…。(③少女45) / ○障りあるはまかでももたまふ。(③胡蝶171) / ○ことに恥ぢなどももたまはず。(④若菜上73) / ○…と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどももたまはず。(④若菜下229) / ○縫ひなどももせざりける、…。(⑤総角294) / ○…憎げにもてなしなどももせばこそ、うたてもあらめ、…。(⑤宿木421) / ○…、うちみじろきなどももせず、…。(⑥蜻蛉268) / ○…、すこしあげたる簾垂うちおろしなどももせず、…。(⑥蜻蛉271)

この「動詞型活用語連用形+など」す型補助動詞「す」の表現形式は、右の係助詞「は」「も」以外にも、「ばかり」「ぞ」「を」「だに」「なん」などの助詞を挟み込んだ用例を見せることになる。それら助詞だけでなく、副詞「え+助詞」「しも」や形容詞連用形「さまあしう」「ことごとしく」などまで介在させた用例を見せることになる。それぞれの各用例数等からは、「動詞型活用語連用形+など」す型補助動詞「す」が、その表現形式を定着させた結果として、新形式への展開をも可能にしたものと感じとれるが、いかがであろうか。

(n) 「は」「も」以外の助詞・副詞「え」・形容詞連用形まで

介在させた用例

○…、隔てなきさまに臥し起きなどは、えしもすまじきを、…。(①若紫262) / ○「…、起き上がりなどもえしはべらでなむ。…」(③藤袴339) / ○…、時によりたるもの、うち誦じなどはかりぞせさせたまふ。(④幻549) / ○…、遣水の水草払はせなど、ぞしたまふ。(⑤総角292) / ○頭のうち置き、胸にさし当てなど、さまあしうする人もあるべし。(⑥蜻蛉249) / ○「…、守りめ添へなど、ことごとしくしたまひけるほどに、…」(⑥蜻蛉257) / ○「…、かはりがはりに加持せさせなど、なんしはべりける。…」(⑥夢浮橋376)

右の(Ⅱ)の用例のうち、副詞「え」を介在させる二用例・形容詞連用形を介在させる二用例の計四例は、現行の品詞論によった副詞や形容詞を介在させている以上、その補助・被補助の関係が成立するとは思えない。しかし、その副詞や形容詞連用形が、そこに存在する補助動詞「す」とどういう関係にあるかを考察したとき、その補助・被補助という構文関係が成立するかもしれない、と感している。ただ、小稿としては、とにかく、このような用例までが存在するということを紹介するにと

どめておきたい。

これほどに、「動詞型活用語連用形+など、す」型補助動詞「す」は用いられていたのである。諸古語辞典や高校生向け古典文法書などが、この「活用語連用形+など、す」型補助動詞「す」の用例も、補助動詞「す」の用例比率にふさわしく認識して取り扱うよう期待して、攷くこととする。

注

- (1) 拙稿「補助動詞「す」の論」(『國學院雜誌』第七十五卷第六号・昭和四十九(一九七四)年)のことで、それに先立って、たまたま山岸徳平・今泉忠義編『高等学校文語文法』(角川書店・昭和三十四(一九五九年)の指導参考書執筆メンバーの一人として参加していた編集会議の席での諸氏の発言が契機となっている。
- (2) 橋本進吉『新文典』(旧制中学校教科書)の教授資料として編集されたものが、この『新文典別記』(富山房・昭和十(一九三五)年)である。
- (3) 文の成分について、連文節からなる部(主部・修飾部)にも一文節だけをいう語(主語・修飾語)にも、「など」が含まれている、ということをおうとしたものである。
- (4) 拙稿「居言雑考―その造語経緯について―」(『國學院高等學校紀要』第21輯・昭和六十三(一九八八)年)で、「物」を冠した「物―」型複合名詞の生産過程などについて、若干考察を試みたことがある。
- (5) 吉沢義則・木之下正雄著『対校源氏物語新釈索引』(平凡社・昭和二十七(一九五二)年)で、補助動詞「す」の被補助語の一部となつて

- (6) いる動詞連用形については、すべてこれを名詞としている。
時枝誠記『国語学原論』（岩波書店・昭和十六（一九四二）年）の第
三章文法論の二「単語に於ける詞・辞の分類とその分類基礎」のホ
「辞より除外すべき受身可能使役敬語の助動詞」に述べられている。
- (7) ④の具体的な用例に即して述べると、「(せ)させたまふ」は「(せさ
せ)たまふ」と見たほうが、「(ふか)せたまふ」は「(ふかせ)たま
ふ」と見たほうが、それらを受ける補助動詞「す」の被補助語の概念
の認識としては適切なものとなるうか。